日本の弓の伝統とその性格

－木弓長弓の理由－

黒須　憲(東北学院大学)

弓道具としての「和弓」を通じた弓道文化の探求

ー和弓の歴史とその特徴ー

- 現在、和弓は竹弓と呼ばれ、木と竹を貼り合わせた複合弓です。しかし、元々は単一丸木弓でした。丸木弓→伏竹弓→三枚打弓→四方竹弓→弓胎弓と発展してきました。一般的には弓の性能向上の為だといわれます。
- 和弓の特徴は２ｍを越す長さと、握り部が中央に無く下から三分一の位置を握ります。上下非対称の弓は和弓の代表的な特徴と言えるでしょう。

- １，握りが中央でない事
- ２，木弓で長弓である事
- ３，竹と複合弓である事

日本弓は庶民の遊興や狩猟弓、他特殊な弓もありますが、今回は軍事に用いられた弓に限ってお話します。

3 日本の弓

四条河原遊楽図屏風

「年中行事絵巻」

化物草紙　部分　室町時代

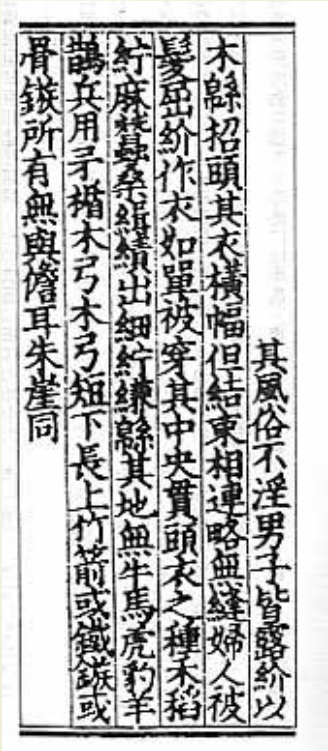
真如堂縁起絵巻

１，握りが中央でない事　理由

- 弓が長大であった事
（操作性を考えて）
- 下や足下を狙う為
（弓を下に傾ける）
- 騎射が盛んになった為
（馬上で射やすいように）

上長下短の和弓について。

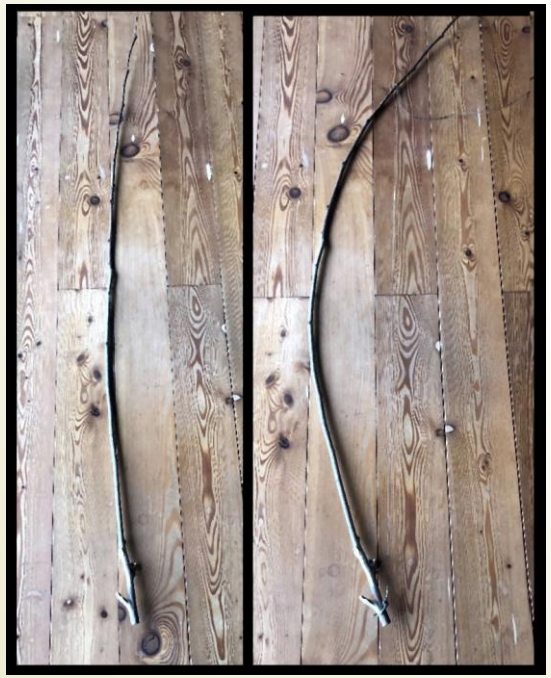
- 銅鐸（弥生時代紀元前2世紀から2世紀の約400年間にわたって製作、使用された）の絵
- 魏志倭人伝（3世紀末280年- 297年の間）の記述やからもかなり古くからこの特徴があったと考えられます。上長下短の弓



其風俗不淫男子皆露紒以
木緜招頭其衣横幅但結束相連略無縫婦人被
髮屈紒作衣如單被穿其中央貫頭衣之種禾稻
紵麻蠶桑緝績出細紵縑緜其地無牛馬虎豹羊
鵲兵用矛楯木弓木弓短下長上竹箭或鐵鏃或
骨鏃所有無與儋耳朱崖同

銅鐸丸木弓　原始弓

- 上長下短の丸木弓は銅鐸の絵からもかなり古く、石器時代から使われていたと考えられます。初期のころはナイフも無く木を細密に削る事は難しい事だったと思います、その為自然に近い状態の木枝を使い弓を作ったと考えられます。太い幹を割り弓の太さに整えることはかなり大変な作業だったと想像できます。自然の枝は元が太く先端は細くなります。これに弦を張り引き分けると上下のバランスが悪くなる為太い方の下から三分一を握りバランスを調整したのではないでしょうか。また握りを下げる事によって同じ弓を大きく曲げることができ強くなります。この弓では中央だと0,6kg、下を握ると0.75kgと0.15kg２５％も強くなります。そして長い弓の方が引き分け中の強さの変化が少なく、大きく引いても破損の危険が少なかったのではないでしょうか。特に丸木弓の場合は重要だったと言えます。銅鐸には上が長く下が短い直弓を引いている姿が見られ，弓の長さは身長の約７割から８割で１２０㎝から１５０㎝ぐらいと思われます。簡単に弓を強くする方法だったと考えます。

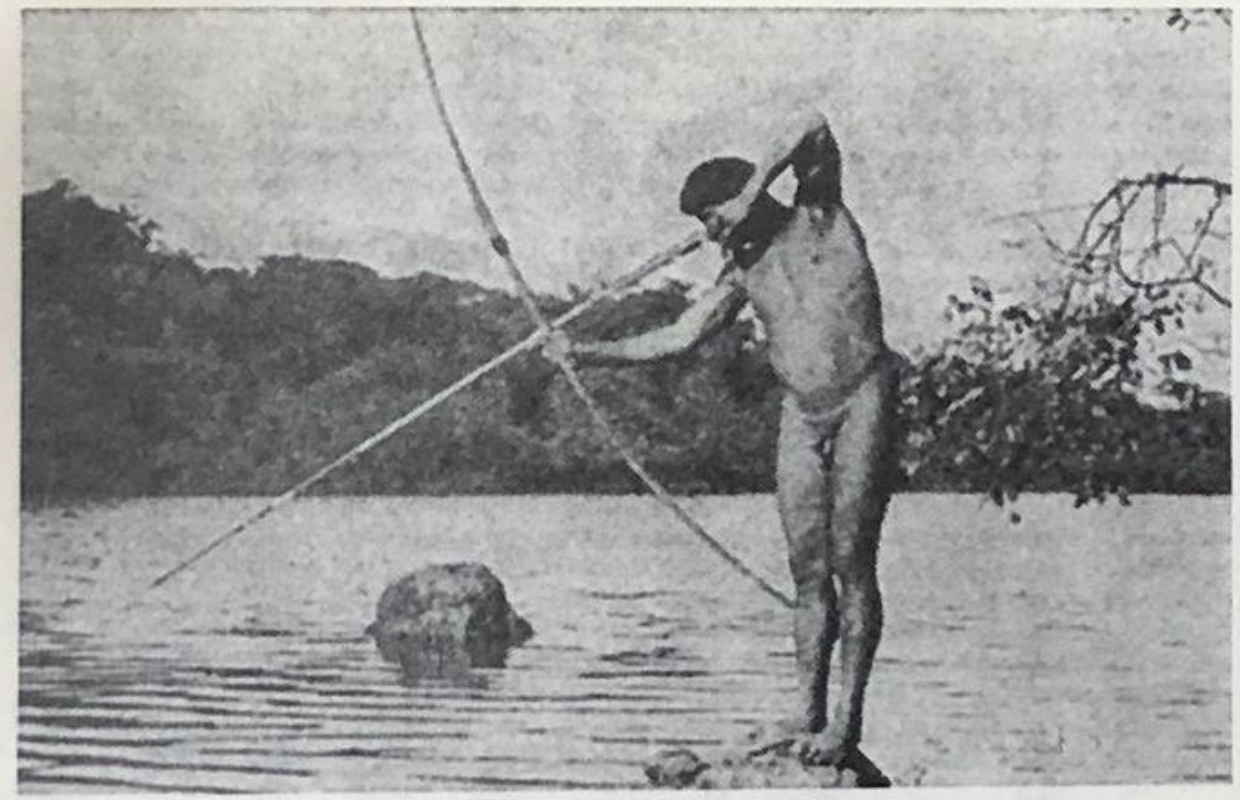


Mongolian deer stones

- あきらかに上長下短の弓が画かれています。
- また、さらに魏志倭人伝には、其四年　倭王復遣使大夫伊聲耆掖邪拘等八人　上獻生口倭錦絳青縑緜衣帛布丹木拊短弓矢掖邪狗等壱拝率善中郎將印綬とあり、正始四年(243）、倭王は木の握りの付いた短い弓と矢を献上した。と述べられています。

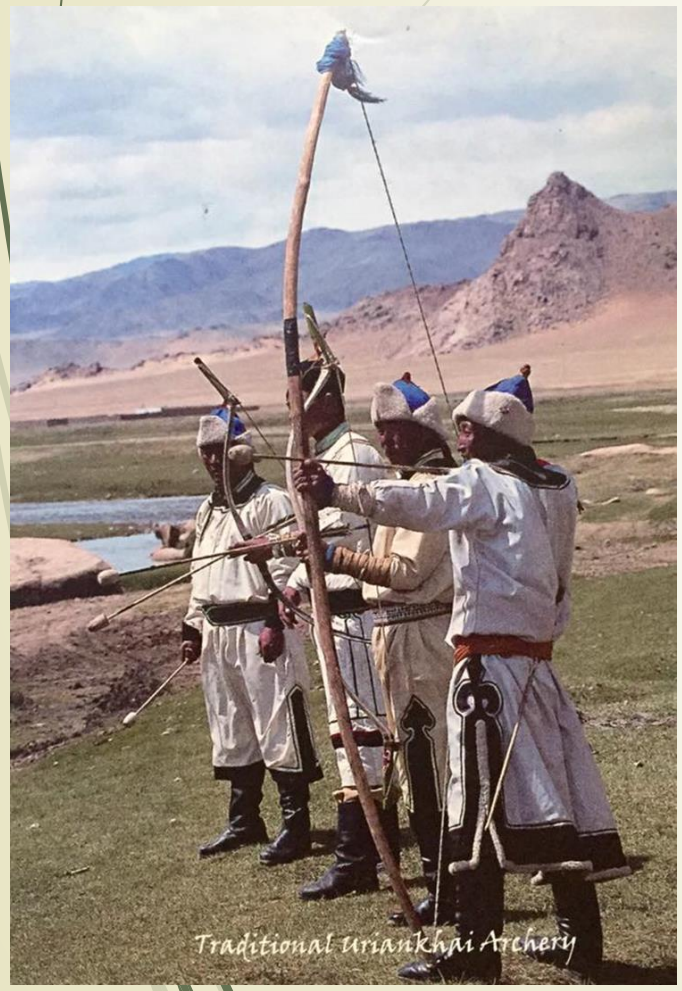
弓の長さや太さとの関係、性能の問題、振動の問題、射姿勢の問題、様々考えられます。

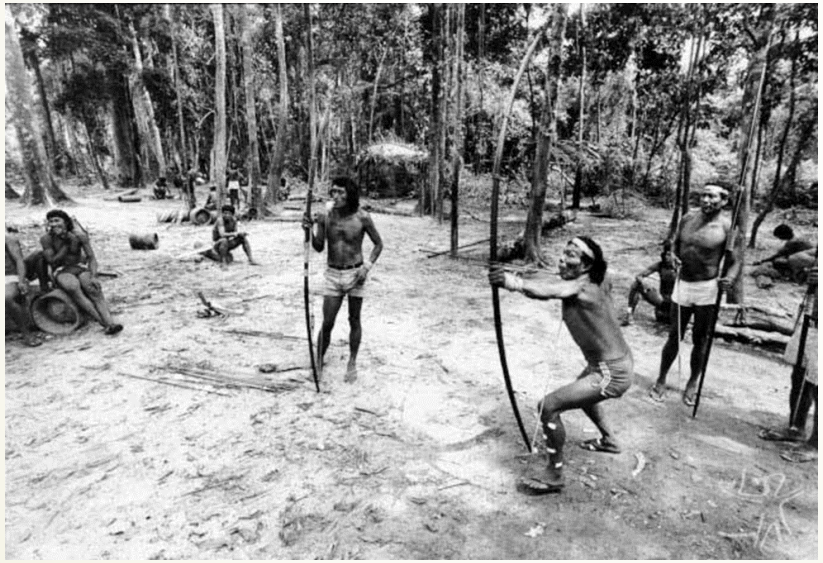
- 考古学者の岡安光彦は上長下短の和弓の理由は「射魚漁」と関係しているとしています。金関丈夫（かなせき たけお2006）「長い弓と短い弓－射魚用から起こった日本の弓」『発掘から推理する』岩波現代文庫に記述があり、中国でも古く射魚の風があり、日本でも奄美や薩南の島々でつい最近まで行われていたと述べています。
- ブラジルカマエラ族は長弓で長矢を用い射魚漁を行い、上長下短の握り方は前下方を狙う射魚の場合、その弓を前に傾けるのに有利な握り方であると述べています。日本の弓制も、もともと射魚の風から起こったものだろうと、述べています。
- 射魚は足下よりも低い水面下の魚を狙う

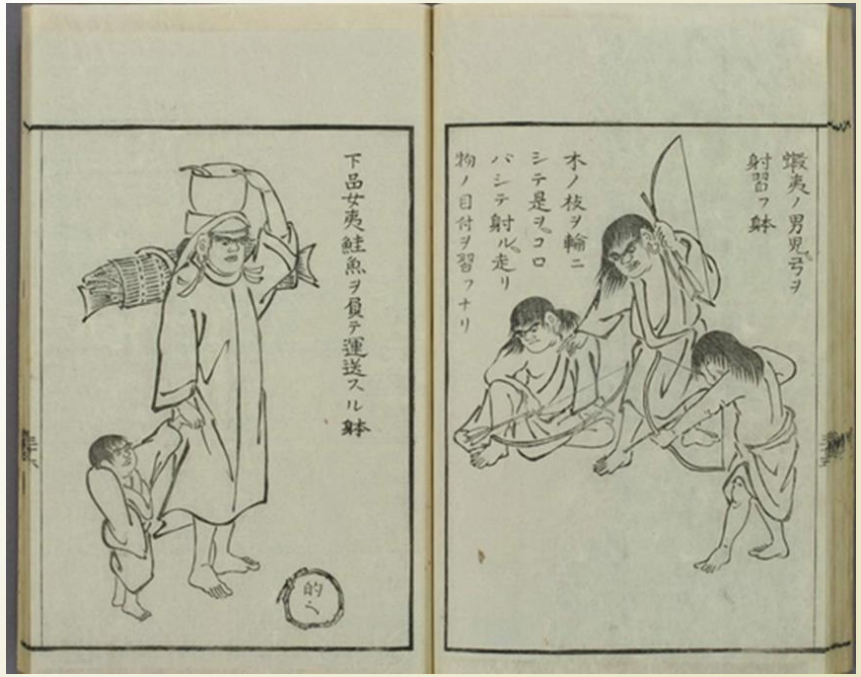


ブラジル・シング川上流地方のカマユラ族の射魚

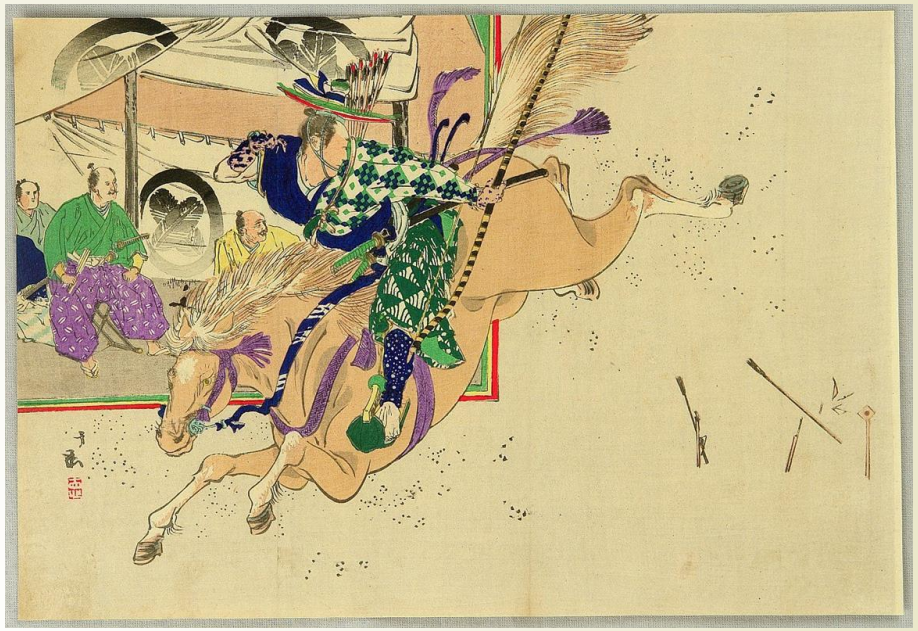
足下の近い獲物を狙う場合弓を前に下に傾ける。





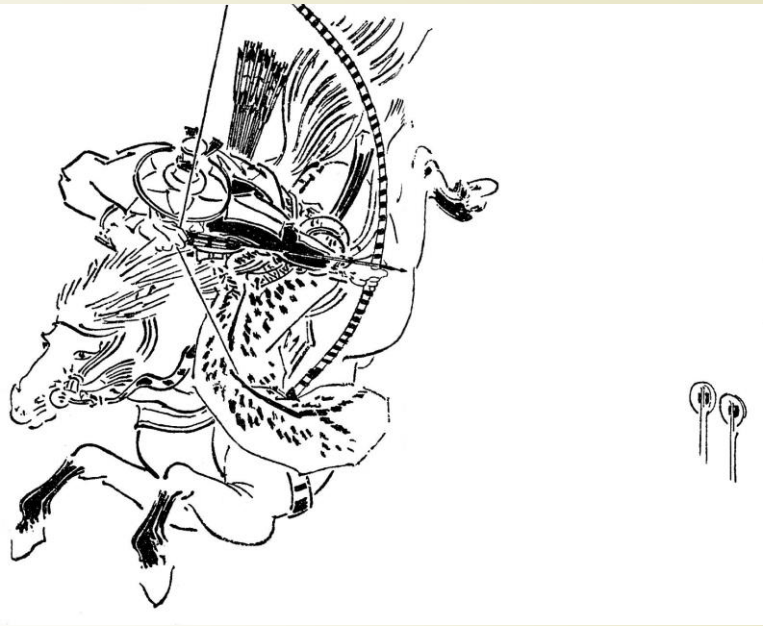


騎射



馬上から下を狙う

応神１５年（４０４）良馬二匹を献上した
６世紀末の推古朝の時期には1,000騎を超える騎兵を中心とする軍事集団が形成され、天皇直属の軍事力として活動していたと言われています。



鳥獣戯画12世紀 - 13世紀（平安時代末期 - 鎌倉時代初期）

諏訪盛澄（金刺盛澄）平安時代後期

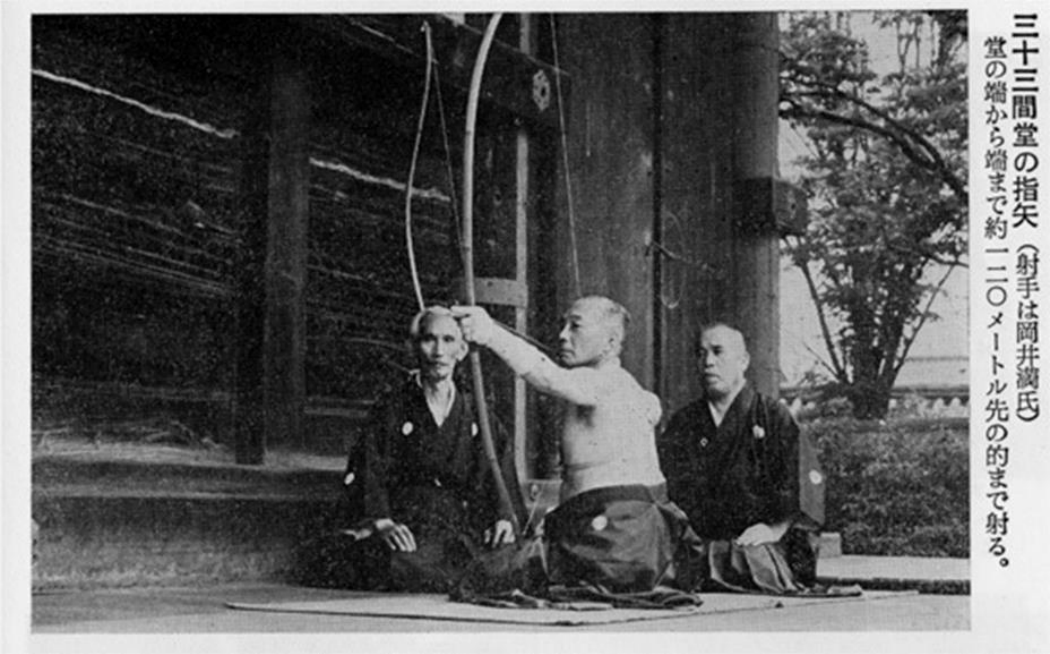
清水寺縁起絵巻　坂之上の田村麻呂

『真如堂縁起絵巻』しんにょどうえんぎ

- 応仁の乱（１４６７年）の様子が描かれています。長弓直弓ですね。 足軽と呼ばれる身軽な兵が活躍しました。

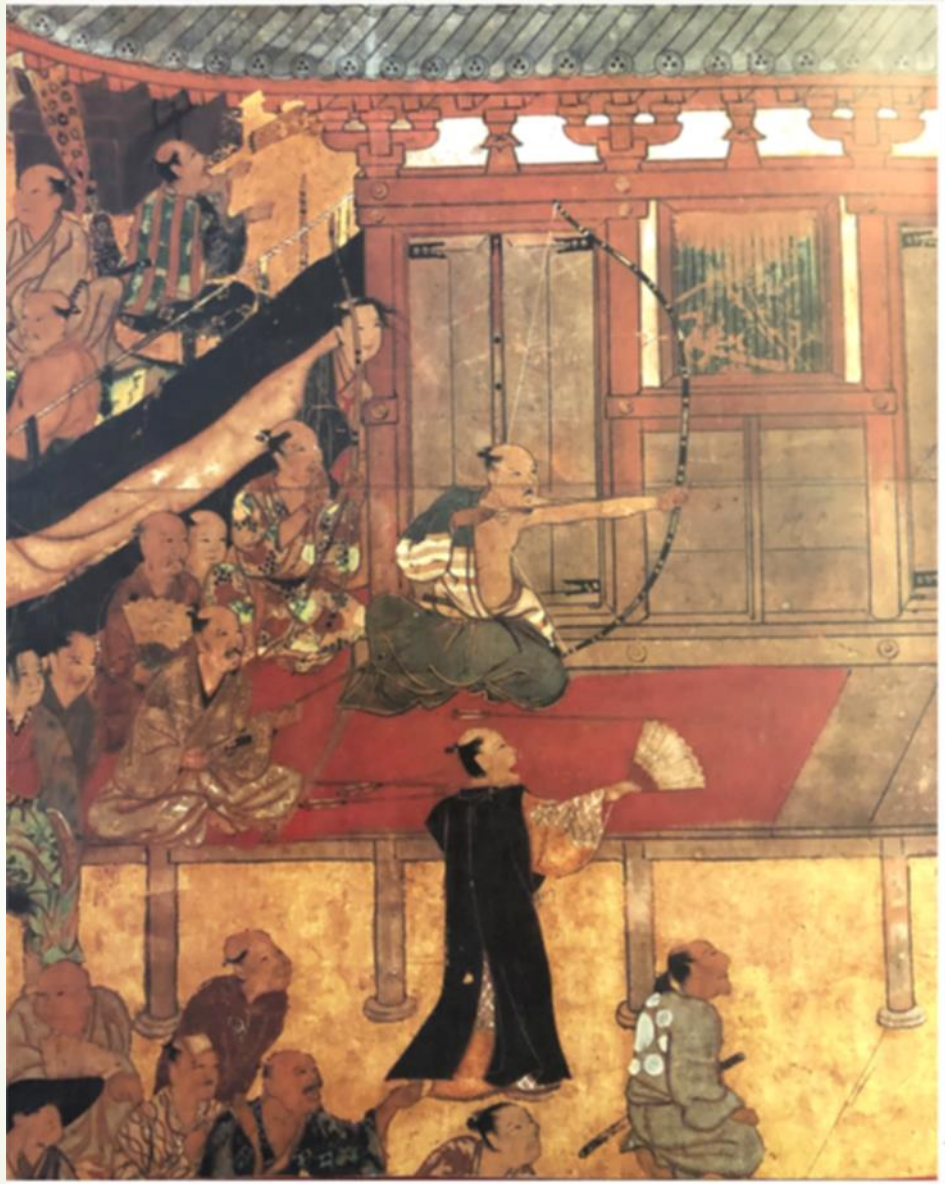
低い姿勢で射る

堂射



三十三間堂の指矢（射手は岡井満氏）
堂の端から端まで約一二〇メートル先の的まで射る。

- 長弓は鎌倉、室町の戦闘で主要武器として使用され、馬上で引いたり、敵の矢を避け低い姿勢の跪いで引いたり移動したり、隠れて盾の陰から引こうとすると、下が長いと邪魔です。
- また江戸の通矢は、座って引いたので更に下を短くしました。



2，木弓で長弓である事

- 日本は大陸から多くの文化を輸入し、騎射と同時に高性能の短弓も入ってきました。それにも関わらず、丸木弓の長弓を使い続けました。
- 何故、日本の軍事弓が扱いやすい短弓（小型軽量高性能は武器の命題）へと変化しなかったのでしょうか、理由について考察します。（私の仮説）

現代の和弓の成立について、弥生時代後期

- 弥生時代中期まで、日本列島では、アイヌの弓とよく似た、縄文時代以来の短い丸木弓が使用されていました。その型式もまちまちです。
- 弥生時代後期（紀元前２世紀から１世紀）になると、それらの弓に混じって、弓幹に樋と呼ばれる溝が施された、型式の整った長弓が一部の（先進的地域、政府がある）で使われ始めていたことが、考古学的資料から確認できます。
- ほぼ同時期かやや先んじて朝鮮半島南部でも同様の弓が使われていたことが分かっているので、新しいタイプの弓が、他の進んだ文物とともに、半島を経由して日本列島に伝来したものと推定されます。
- 原始和弓の起源　2015年『日本考古学』岡安光彦

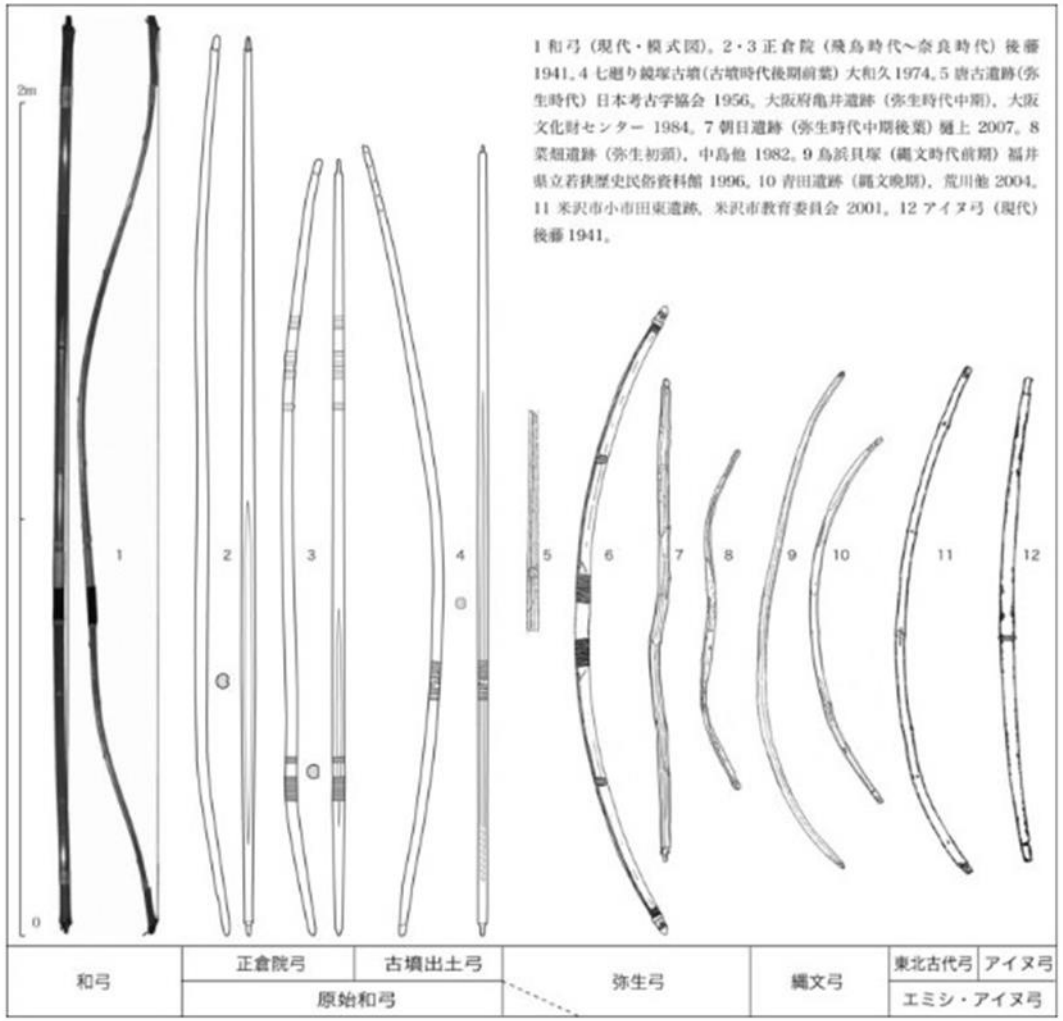


図1　日本列島のさまざまな弓

塗り弓

- 東京都東村山市　下宅部（しもやけべ)遺跡
- 時期：縄文時代後晩期（2700年～4000年前）
- 収蔵：東村山市教育部ふるさと歴史館
- 粘りと弾力のあるニシキギ属の木から切り出して、糸や樹皮を巻きつけたあと漆で塗り固めた弓。鮮やかな赤はベンガラと水銀朱が使われている。
- 漆塗り丸木弓は「飾り弓」とも呼ばれていましたが、握りと思われる箇所にこすれた跡があったり、漆を塗ることで撥水性が得られたり、強度も増すことから実際に狩猟に使われていたと思われる。

青森県山野峠遺跡　射日神事

群馬県・矢瀬遺跡

新潟県長岡市

福島県・山ノ神遺跡

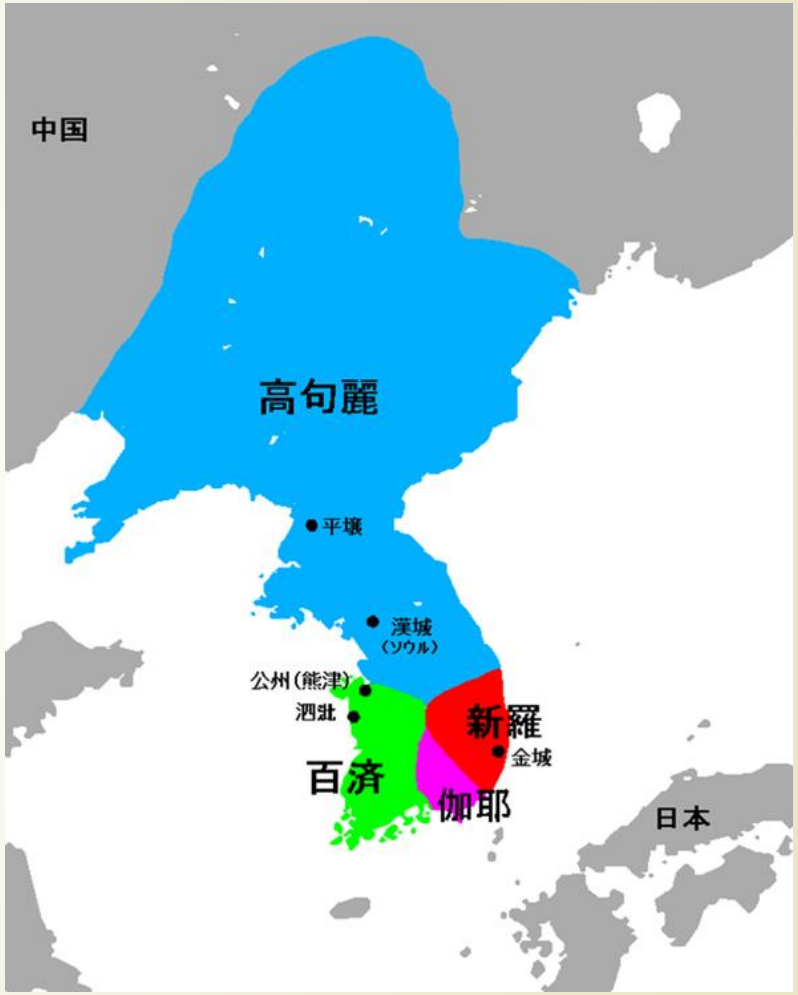
蝦夷、アイヌの弓

- 魏志倭人伝には、
- 其四年　倭王復遣使大夫伊聲耆掖邪拘等八人　上獻生口倭錦絳青縑緜衣帛布丹木拊短弓矢　掖邪狗等壹拜率善中郎將印綬
- とあり、正始四年(243）、倭王は木の握りの付いた短い弓、矢を献上した。と述べられています。
- 献上品として短弓は日本を代表する弓矢であったということですね。

- 弥生時代後期になると、それらの弓に混じって、弓幹に樋と呼ばれる溝が施された、型式の整った長弓が一部の（先進的地域）で使われ始めていたことが、考古学的資料から確認できます。
- ほぼ同時期かやや先んじて朝鮮半島南部でも同様の弓が使われていたことが分かっているので、新しいタイプの弓が、他の進んだ文物とともに、半島を経由して日本列島に伝来したものと推定されます。

弥生時代後期　渡来人

- 最近のＤＮＡ解析から日本民族は縄文人を祖先として外部からの侵略・征服といった大きな圧力的変化もなく，弥生時代以降にかなりの大陸系民族が渡来し混血を繰り返してゆるやかに現在に至っていると報告されています。現代日本人の殆どが混血だと言えます。日本人も日本文化も大陸との混血を繰り返し成立してきました。影響と言うよりミックスです。ミックスと云うより同族と言えます。
- 特に弥生時代四，五世紀、応神天皇の時代には大和朝廷大きな影響を与えた新羅の秦氏や 百済の東漢氏が渡来しました。秦氏は新羅からきた弓月君（ゆづきのきみ）を祖とする氏族で弓月君は１２７県の３万～４万人の人夫とともに九州に来ました。東漢氏は１７県の民とともに来ました。その頃朝鮮半島では北方騎馬民族からの侵略に大きな動乱が起きていてそれから逃げるように日本に渡来したわけです。



丸木製の木弓「弧」、動物の角や腱（すじ）で作った角弓「弱」

- 金関丈夫（かなせき たけお）氏は魏志倭人伝で述べられた三世紀頃について、「中国ではそのころ、実用的の弓に、丸木製の木弓すなわち「弧（こ）」と、動物の角や腱（すじ）で作った角弓（つのゆみ）すなわち「弱(けん)」の二種類があった。木弓は長くて歩兵用に、角弓は短くて騎射用に用いた。」「馬を乗りまわす遊牧民の蒙古人などのは、短い弓である。長い弓を用いて歩兵戦をやっていた漢人は、北方の蕃族の短弓騎射戦法に敵する事ができなくなって、その戦法をこちらでも採用した紀元前四世紀末に戦国の趙（ちょう）が強大にになったのは、そのためである。」と述べています。
- 弥生時代日本に多く渡来し朝廷の中で大きな権力を得た渡来人は、北方騎馬民族の侵略に屈した漢人達であって、多くは百済人や新羅人でした。彼らが使っていた弓が木弓の長弓だったと言えます。その制作技術は朝廷に伝えられ造兵司の弓削や矢作、鞆張 羽結に組織されたのです。馬を伝えたのも百済です。従って騎射技術が普及しても使用した弓は木弓の長弓だったと考えられます。
- 日本の弓が長弓の理由は渡来人と関係し、元々の朝鮮半島における民族抗争が大きく影響していると想像します。
- 朝廷と早い時代から関係が深かったのは百済や新羅系の渡来人で、その為歩射を中心とした長弓が定着し、後発の高句麗系の騎馬民族の短弓は採用されませんでした。朝廷の高句麗からの使者に対する対応や高麗人を一個所にまとめて管理した事や、蕃客（ばんかく）と呼ばれ，異民族扱いをされていました。
- 阿弓流為との関係からも想像できます。元寇でも高麗人は蒙古軍と共に日本に攻めてきました。現代もその延長で、続いていると思うと面白いですね

百済と倭の形式の共有

- ５世紀頃（西暦 401年から西暦500年まで）、弓の形式と共に、半島の形式と同じ長頸鏃が共有されるようになる。これは対高句麗･新羅戦に備え、弓と矢の統一を図ったものとみられる。
- 東漢氏みられます。
- 東漢氏 (やまとのあやうじ)は『肥前国風土記』によれば、602年の新羅征討計画の際には兵器の製作を担当しました。
- 律令制度のもと国家は高度の兵器材料を集中し、中央の造兵司、地方の国衛工房で諸兵器を製造させました。兵器の製造や管理を独占することは朝廷にとって権力維持のために重要な課題だったと言えます。

律令制度

- 造兵司（ぞうへいし） (律令制)
- 律令制官司の1つ。兵部省（ひょうぶしょう、つわもののつかさ）に属し、兵器の製造を行う。和訓は「つわものつくりのつかさ」
- 兵器の製造とともに、兵器製造のために必要な技術集団を支配することを主たる任務とする。技術集団には雑戸（ざっこ）に属する鍛戸（かぬちへ）・甲作（よろいつくり）・靫作（ゆぎづくり）・弓削（ゆげ）・矢作（やはぎ）・鞆張（ともはり）・羽結（はゆい）・桙刊（ほこけずり）、品部に属する爪工（はたくみ）・楯縫（たてぬい）・幄作（あげはつくり）があった。雑戸は10月から翌年3月までに戸ごとに1丁、品部は必要に応じて臨時に徴発された。
- 天平14年（744年）の雑戸解放の影響で廃止されたが、天平宝字2年（758年）以前に官司としての造兵司は復置された。寛平8年（896年）に新設の兵庫寮に統合されて廃止された。
- 以下、『令集解』所引官員令別記、雑戸、鍛戸 217戸、甲作 62戸、靫作 58戸、弓削 32戸、矢作 22戸、鞆張 24戸、羽結 20戸、桙刊 30戸、品部、爪作 18戸、楯縫 36戸、幄作 16戸

「清水寺縁起絵巻」（土佐光信）永正 14 (1517) 年室町時代

- 清水寺の草創縁起，創業者の坂上田村麻呂（758年）の蝦夷（えぞ）討伐（791年2月25日）が描かれています。作成されたのは、室町時代・永正14年(1517)でその信憑性は不明ですが、かなり詳しい伝承があったものと思われます。上中巻にみるような蝦夷との合戦場面はほかに類例がなく、16世紀はじめころにおいて朝廷の人間がイメージした「蝦夷」の姿を伝える記録としても重要である。と言われています。
- 蝦夷軍と大和朝廷軍の戦闘場面が描かれています。朝廷軍が直弓の上長下短の弓を使っているのに対し蝦夷軍は違った形の弓を使っています。大陸系の握りが中央にある湾曲弓です。意識して描いたのか、史実に忠実なのかはわかりません。

「清水寺縁起絵巻」より

蝦夷討伐

- 坂上田村麻呂が征夷大将軍、に任命され、副将軍には百済教雲・佐伯社屋・道嶋御楯の3名がつき蝦夷討伐が（794年）行われました。
- 坂上氏は漢系渡来系氏族の東漢氏と同族と言われ、東漢氏は『肥前国風土記』によれば、602年の新羅征討計画の際には兵器の製作を担当しました。
- また、百済王氏は百済国王(義慈王)・百済王族の直系子孫という特別な出身でした。特に古くから朝廷と関係が深かったのが百済だと言えます。
- 実は坂上田村麻呂は漢直系氏族の坂上苅田麻呂の次男です。坂上氏は代々弓馬の道を世職とし馳射を得意とする武門一族だったらしいです。兄妹は天皇の妃になってます。
- 渡来人同士の戦いだったと言えます。上手に朝廷に利用されたとも考えられます。

蝦夷

縁起絵巻には、立派な船も描かれており、日本海を渡って来ることは充分に可能で、朝廷を経由せず直接東北に渡った渡来人と考えられます。
『続日本後紀』に「弓馬の戦闘は夷獠（蝦夷）の生習にして、平民の十、其の一に敵する能はず」と語られ、騎馬をもちいた弓術に秀でて、生まれながらの習性であった。と述べられています。
『通天』には「尤も弓矢を善くす」と記されており、蝦夷は狩猟を生業として、機動力に富んだ名馬を飼育し、日常生活の中で、自身の主な戦闘スタイルである弓馬（騎射）の技術を磨いていたと言われます。

また、『吾妻鏡』貞応３年（1224年）には難破した高麗船の荷物の調査記録に、高麗の弓について「（本朝の弓と比べて）短く、夷弓（蝦夷の弓）に似ていて、皮製の弦である」と記されています。もしかしたら蝦夷、アテルイは、百済や新羅と戦った北方騎馬民族の高麗(高句麗）人だったのではないかと想像できます。言葉も通訳が必要だったと言います。
馬は名馬として都にも知られ、わざわざ使者をだして買い求めることが横行し、たびたび禁令が出されたと言われています。
坂上田村麻呂と戦ったアテルイは阿弖流為と書きますが「弖」の字は、弓を作る人という意味で、蝦夷の「夷」は弓と大が重なった良弓、または弓の名手を意味する文字です。
大きな船で直接馬や弓文化を運んで来たと想像できます。

木弓で長弓である事　まとめ

何故日本は木弓の長弓を使ったのか使い続けたのか？

- 魏志倭人伝、其地無牛馬虎豹羊鵲。 その地には、牛・馬・虎・豹・羊・鵲（かささぎ）はいない。兵用矛・楯・木弓。木弓短下長上、竹箭或鐵鏃或骨鏃。所有無與儋耳・朱崖同。とあり
- 短弓の材料となる牛の角、水牛はいなかった。と理解出来る
- 朝廷は特に百濟人と深い関係をもって成立してきた。むしろ同族
- 朝廷の弓や兵器を作ったのは木弓を使っていた百濟系の渡来人。
- 朝廷は武器の製造を独占管理し、百濟の弓を基として同規格の弓を製造し、それが日本のスタンダートとなった。
- 木弓で長弓を使い続けた理由は、材料が無かったことと、短弓は敵対していた高句麗や北方騎馬民族の武器であったから。
- 倭の戦士集団は、断固として独自の武装システムを堅持し。取り入れたのは乗馬の風習だけで、弓は定式化した漆塗り丸木の長弓が普及した。その普及には、首都が陥落した際に亡命してきた百済の工人集団が寄与していた可能性が高い（馬具生産に関しても同様）

射礼・賭弓・渡来人
奈良（７１０－７８４）
平安初期の射礼（年中行事）

- 「年中行事御障子文」には正月１７日射礼，１８日賭弓,１０月５日弓場始
- 六国史（りっこくし）日本書紀 - 続日本紀 - 日本後紀 - 続日本後紀 - 日本文徳天皇実録 - 日本三代実録によると，射礼（大日向克己）1993年は１００清寧４（４８９）大化３（６４７）から仁和３（８８７）まで１００回以上行われ，蕃客（ばんかく，新羅，渤海，高句麗）が参加し，その国の弓で射ている。
- 蕃客（ばんかく，新羅，渤海，高句麗）とは異民族の意味があり百済人

渡来人

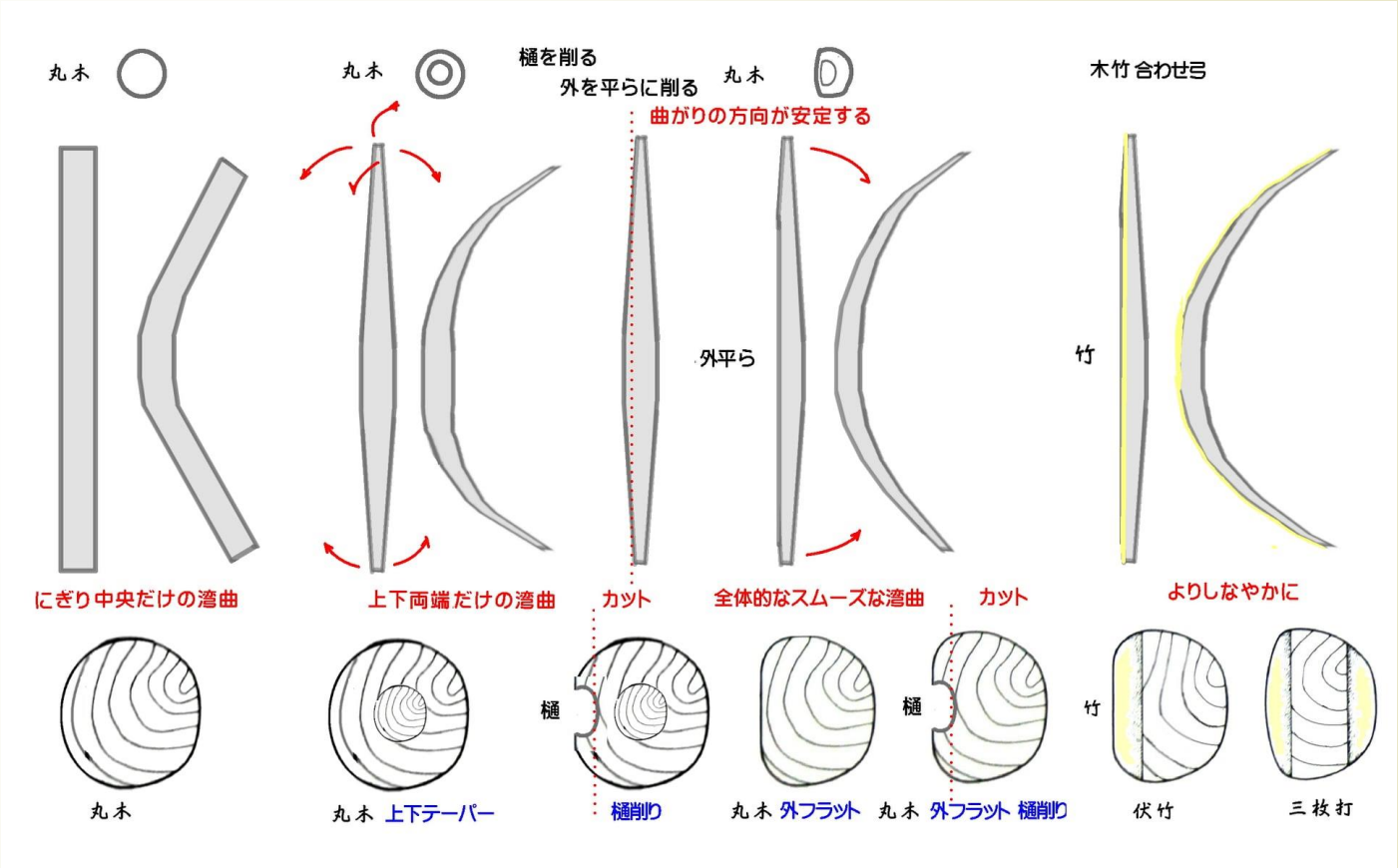
- それまでにも日本には多くの渡来人が帰化し「新撰姓氏録」（815）によると平安京・大和・摂津の日置(へき)氏は伊利須使主（いりすのおみ）の後裔で飛鳥(あすか)時代に高句麗(こうくり)(朝鮮)から来た渡来人であると記述されています。
- その他,伊利須使主（いりすのおみ）は大和の鳥井・栄井・吉井・和(やまと)氏,河内(かわち)の島本(木)氏などの祖とされ。斉明天皇2年(656)に高句麗から副使として派遣された伊利之(いりし)と同一人の可能性がある。伊利須意弥,伊理和須使主,伊和須ともある。
- 都（京都）周辺には多くの渡来人が住んでおり多くの文化的影響を受けたと考えられる。

３，竹と複合弓である事　三枚打

- 海東諸国紀 （１４７１）申叔舟　朝鮮人の見た日本と琉球
- 申叔舟は１４４３に書状官として来日し，日朝間の応接・通商規定を集録し日本・琉球(りゅうきゅう)の国情を記した「海東諸国紀」（１４７１）を著した。また,臨終のときには成宗に対して「願わくば国家,日本と和を失うことなかれ」と述べ,日本との交隣の重要性を遺言したという。
- 日本は足利義政が、室町幕府第8代征夷大将軍に選出され1449年に正式に就任し，結城合戦（1440年）や，応仁の乱（1467年 - 1477年）が起きている。
- 「海東諸国紀」には国俗の項に，日本の弓の事について述べられており，「兵は好みて槍・剣を用う。（俗，能く鉄を練りて，刃を為る。精巧比無し）弓は長さ六，七尺。木の理直なるものを取り，竹を以て其の内外を夾みて之を膠く。」とある。
- 長さは1.8～2.1mぐらいの木製の直弓で内側と外側を竹で挟んだ合わせ弓だと解釈できる。
- 結城合戦絵巻や応仁の乱図に描かれている弓は（勿論後世になってから描かれ，いい加減だとも言えるが），直弓の塗り弓で籐で補強されている。和弓が現代の弓の様に湾曲してきたのはこれ以降だと考えられる。

丸木弓の発展　　三枚打

- １，あまり削りを加えず樹木の幹や枝をそのまま使って弓にした。
- ２，上下両端を細く削り、曲がりを上下に分散し反発力を強めた。
- ３，樋を入れたり外側を削ることによって曲げの方向を決め、湾曲が全体に分散するようにした。
- ４，材料の品質を補い破損をカバーする事と、木を薄くしてしなやかさを増す為、強い竹を外側に貼り付けた
- ※樋は外にある弓、内にある弓、両方あり、その目的と効果については不明です。



- 年中行事絵巻、平安後期の宮廷行事や祭礼、法会などを描いたもの。原本は六〇巻といわれ、後白河院の命で常磐光長らが描いたが失われ、現在は寛文元年（一六六一）頃に住吉如慶らが模写した一六巻のほか、数種の模本が伝えられてい 。原本は保元2～治承3（1157～79）年頃の成立と推定され，同一規格の弓矢かなり多くの弓矢が描かれています。

同形同長同規格の弓

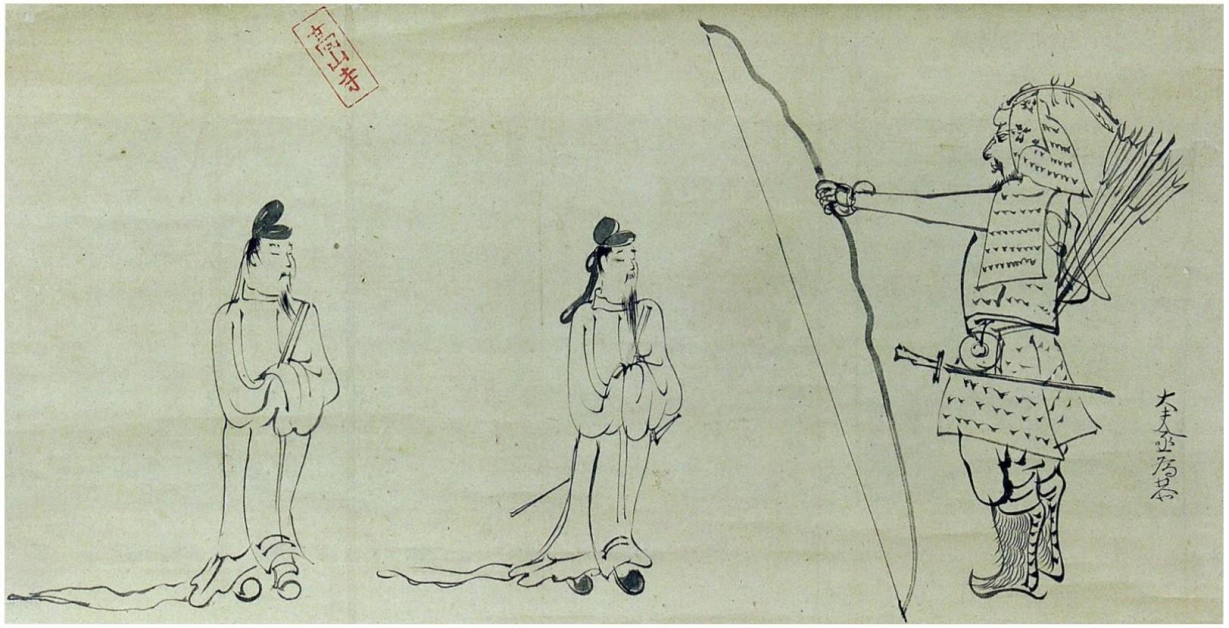
理由・材料不足

- 丸木弓→伏竹弓→三枚打弓→四方竹弓→弓胎弓と発展してきたと言われ、一般的には弓の性能向上の為だといわれます。しかし、それは誤りで、竹を貼り付けたのは材料不足を補うためでした。国家は高度の兵器材料を集中し、中央の造兵司、地方の国衛工房で諸兵器を製造させました。
- 兵器の製造や管理を独占することは朝廷にとって権力維持のために重要な課題だったと言えます。しかしこの様な規格化された大量生産は材料不足につながり、良質のイヌガヤや、梓（ミズメ）、槻(欅)の調達が困難になり、屋敷の庭にはそのような樹木を植えることが奨励されました。
- そのような事から、材料不足を補うため、多少の節や曲がりやバラツキがある材料を使い、それらをカバーし、保護するために柔らかな竹を被せたのが伏竹の弓だと考えます。すなわち悪い材質の反発力が強く堅く折れやすい木を柔軟で弾力性の高いしなやかな竹でラッピングをしたと言えます。
- 長さもあり、竹は単独では弓の素材としては十分な張力を得られませんが、木と併せ複合素材化することによって木の反発力を活かす役割を果たしたと言えるでしょう。現在は接着剤の性能や削りや焼きの技術により、竹だけでも充分な性能を得られる様になりました。現在もヒゴ数や積層構造の合板の中芯を丈夫でしなやかなグラスでラッピングしている様な物だと思います。

将軍塚絵巻「七曲り弓（七もじりのゆみ）」

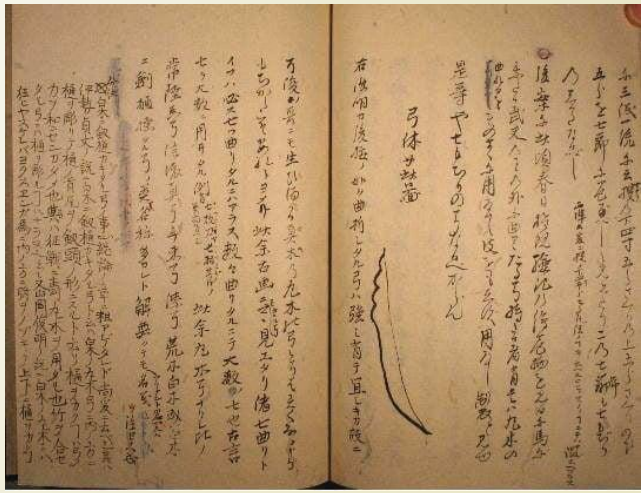
将軍塚とは桓武天皇が平安京造営に際し、王城鎮護のため、将軍（坂上田村麻呂（758年））の像を土で作り鎧甲を着せ弓矢と太刀を持たせ、京都御所の方を向けて埋めるように命じた塚であると伝えられています。平安末期以後、天下に異変があるときは必ずこの塚が鳴動して前兆を表すという伝説が生まれ、『源平盛衰記』によると、源頼朝挙兵の前年、治承三年（1179年）七月には、三度にわたってこの塚が鳴動し、次いで間もなく大地震が起こったといわれます。この絵によると坂上田村麻呂が持っている弓は「七曲り弓（七もじりのゆみ）」です。くねくね曲がっている弓です。

山脇正準の「丸木弓考」によると七戻真弓或いは七曲黒塗り弓（七もじりのゆみ）といい，丸木のまがれるをそのまま用いて皮もむかず作るとあります。図のように折れ曲がっている弓は強くて良いと述べられています。七とは７という数の意味では無く多くとの意味だとしています。また，もじりとは捩りで麻を柄巻きのように巻くことだとも書いてあります。曲がり方も一つの美しさ，とみていたようです。
また直線よりも，曲がっていると弓幹(弓の長さ）自体が長くなり(薩摩勢のように）折れにくくなるのではないでしょうか。



七曲り弓（七もじりのゆみ）

弓がくねくね曲がってますね。
山脇正準の「丸木弓考」によると七戻真弓或いは七曲黒塗り弓（七もじりのゆみ）といい，丸木のまがれるをそのまま用いて皮もむかず作るとあります。
図のように折れ曲がっている弓は強くて良いと述べられています。七とは７という数の意味では無く多くとの意味だとしています。また，もじりとは捩りで麻を柄巻きのように巻くことだとも書いてあります。
曲がり方も一つの美しさ，とみていたようです。
また直線よりも，曲がっていると弓幹(弓の長さ）自体が長くなり(薩摩勢のように）折れにくくなるのではないでしょうか
真っ直ぐだけが良いとは限りませんね。
私は根性の曲がった、ひねくれ者。
弓目録にも、弓は曲がる事によって用を為す。と書いてあります。

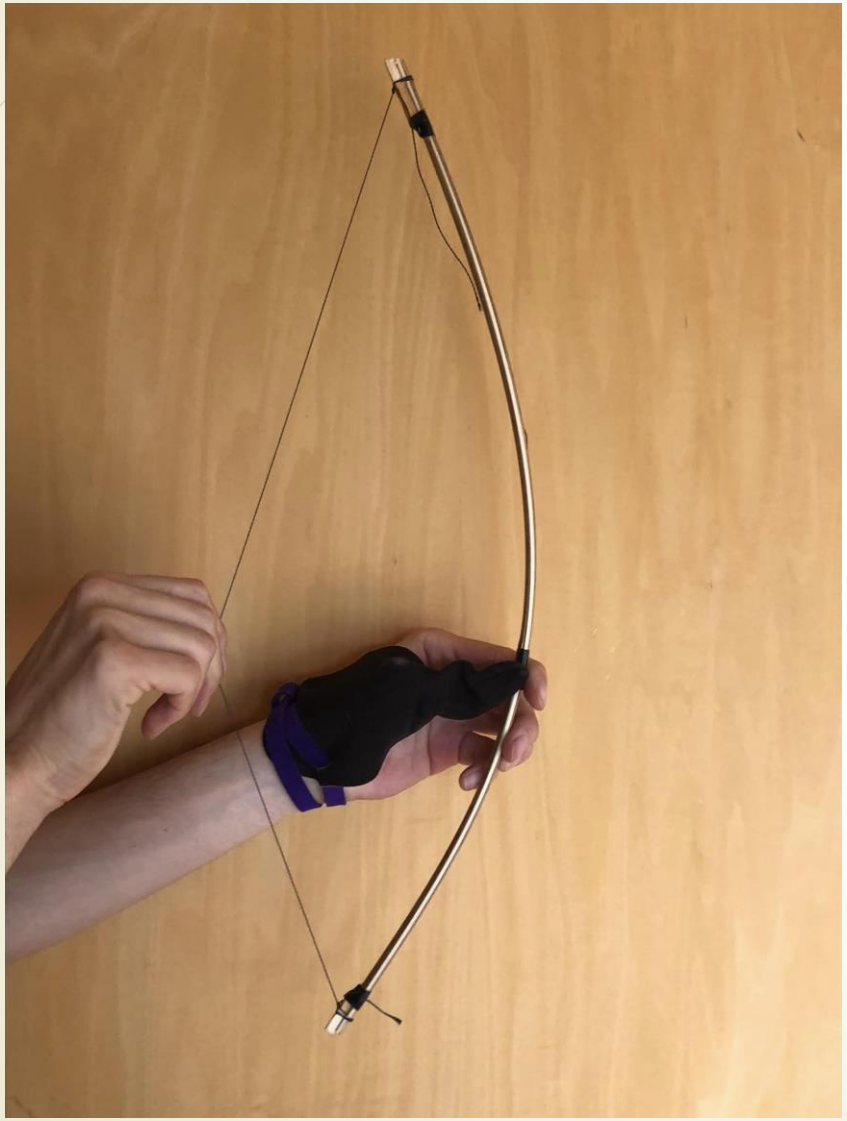


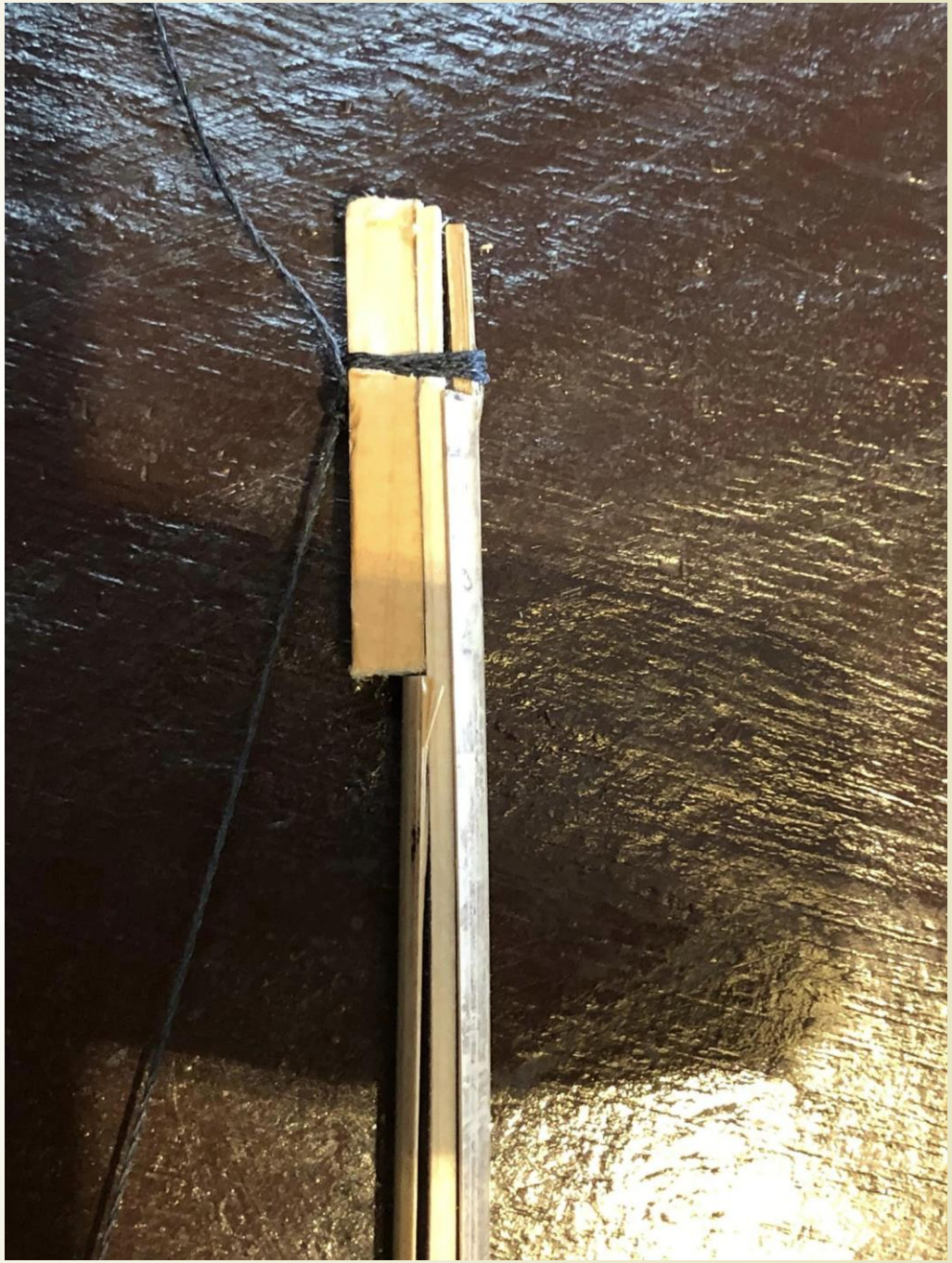
義家朝臣鎧着用次第

- 故実家である伊勢貞丈は「義家朝臣鎧着用次第」で「弦を下へなしにぎりより上五寸計のほどをとりて提げて持つべし軍陣には丸木弓本式也雨露などのしめりをいとう事なし」と述べている。
書名は[目]首より
- 源 義家（みなもと の よしいえ）は、平安時代後期の武将
- 生誕　長暦3年（1039年）
- 死没　嘉承元年7月4日（1106年8月4日）
- 享年68
- 「國書總目録 補訂版」(岩波書店, 1989-1991)の参考項目書名: 義家朝臣鎧着用伝, 義家朝臣鎧着用図, 鎧着用次第
- 著者名は[跋]より
- 安永9年伊勢貞丈による[跋]あり
- 挿絵あり
- 印記: 「鳥居文庫」
- 保存状態: 虫損あり (裏打ち補修あり)

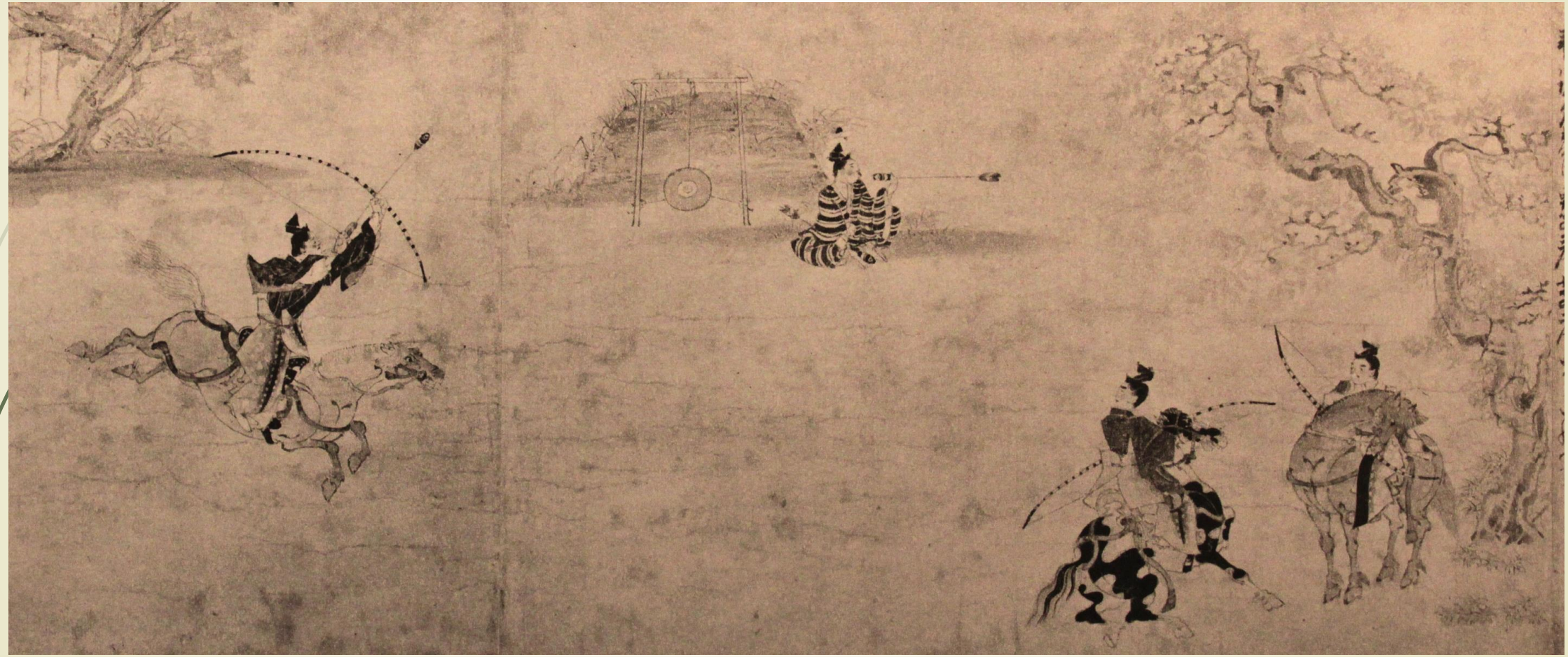
丸木弓・伏竹弓・三枚打

三枚打・堰板

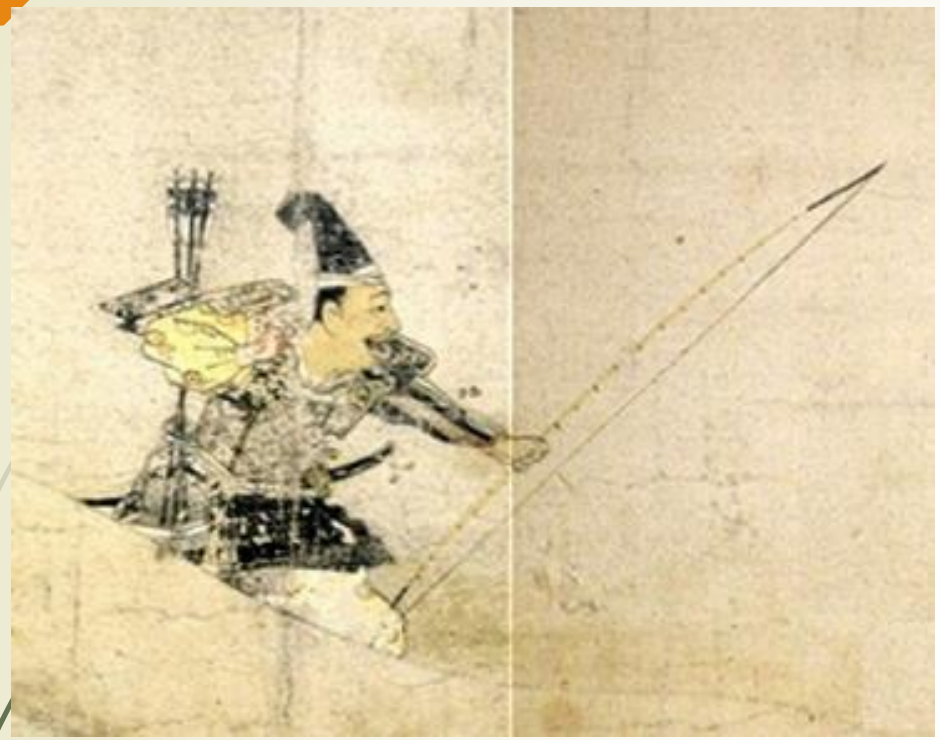




堰板は三枚打の弓から



後三年合戦絵巻寛治元年（1087）



後三年合戦絵巻です。描かれた年は詳しくはわかりません。応徳3（1086）年に東北地方で起きた後三年の役を描いた物です。これに描かれている弓は両端が黒く塗られています。堰板を描いた物でしょうか？途中も何カ所か糸か籐で補強されています。 前九年合戦絵巻には両端が細くなっている塗り弓の他に七曲の弓も描かれているため単一の丸木弓と理解します。また男衾三郎絵詞にも白木の丸木弓が描かれています。ただ１００年も後の平治物語絵巻にも七曲の弓が描かれているため単一弓だったと考えます。勿論身分によって使っていた弓も異なっていたと考えられますが、堰板や複合弓の出現はこの頃なんでしょうかね。

おいのさか図（部分）
大江山の峠の麓です。鎌倉時代１４世紀
子供が弓を引いています。
何歳ぐらいでしょうか？
釣り的ですね。弓は直弓です。丸木弓でしょうか。
手前は塗り弓です。かなり矢束は引いていますが矢は顎下です。
親でしょうか家の中から見守っています。
構図は年中行事絵巻の賭弓によく似ています。

聖徳太子

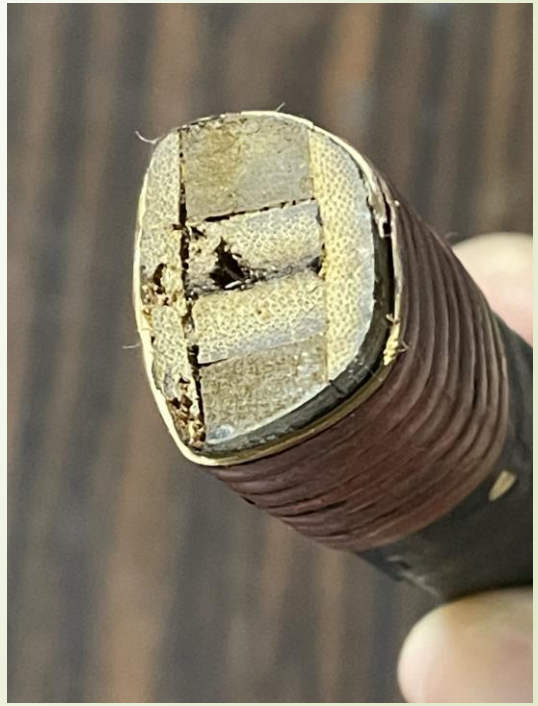
- 生誕　敏達天皇3年1月1日（574年2月7日）
- 死没　推古天皇30年2月22日（622年4月8日）

ヒゴ入り弓胎弓

- 16世紀でしょうか？　小田原で発見されたものが確認されたヒゴ弓として最も古いものでしょうか。製作のための道具出現、日置以後の射法の変化などを考えると15世紀半ばかもしれない推測はされていますが、可能性と推測だけであって、確証までは到っていません

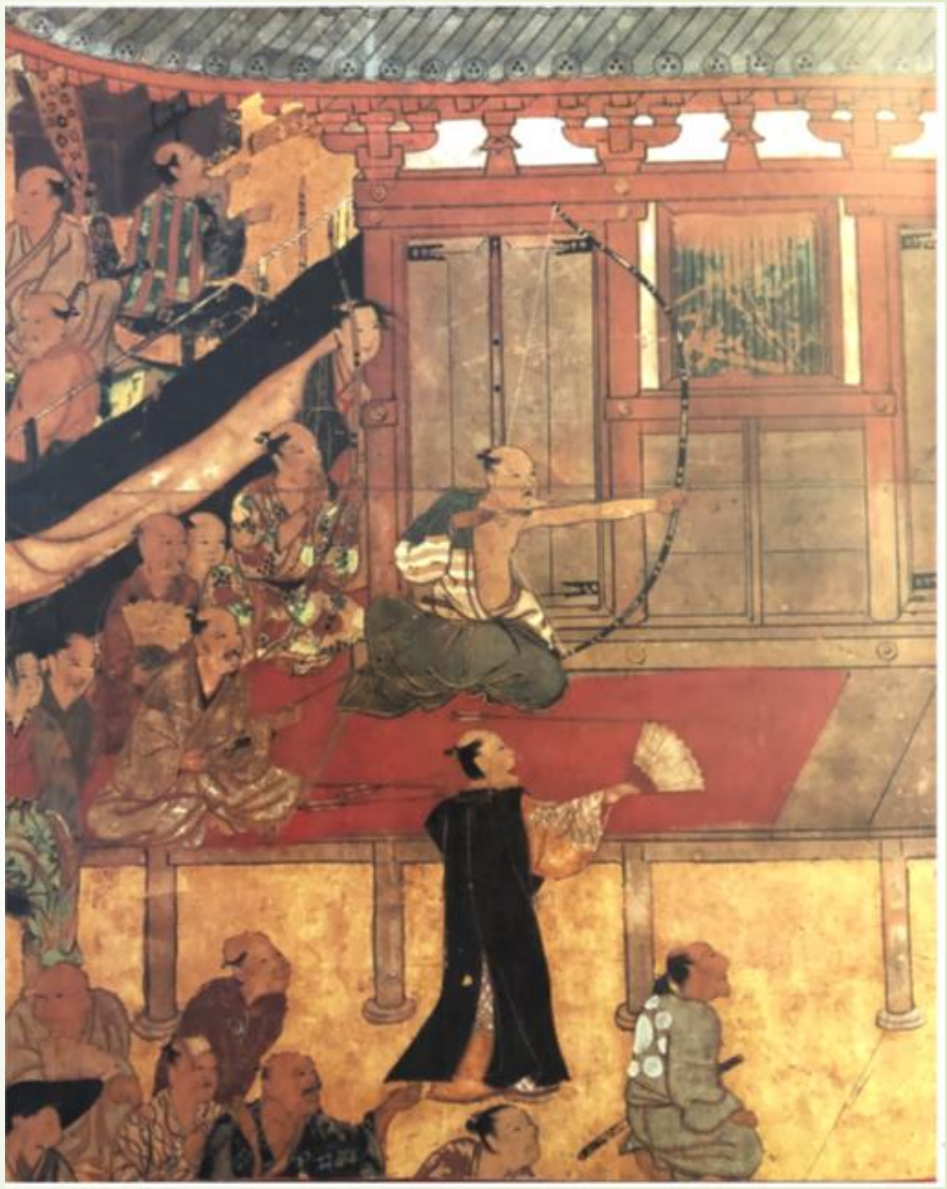
- 小田原城三の丸幸田口跡第Ⅵ地点出土の弓胎弓

-　－現代弓師の視点から和弓の歴史と分類を再考する－（加藤康博）
これまで弓胎弓の完成を江戸初期とする説が有力だったが、小田原城跡から15～16世紀の漆塗り弓胎弓が出土したことから、戦国時代後期までに完成していたことが判明した。（詳細は構造欄参照）。江戸初期は通し矢競技が盛んに行われた。



堂前・的中率

- 弓具の工夫研究も堂射の隆盛とともに進んだ。
- 実力は前掲の稽古日記でもわかりますが、京都三十三間堂で実際に通矢記録に挑戦した仙台藩士、遠藤金右衛門時影２１歳の公式記録を紹介します。
- これは殿様の前で近的を引いた時の記録です。
- 三千射中外十五本、百発皆中十七回、連発連中九百二十三本、三千射中二千九百八十五中
- 九割九分五厘の驚異的な的中率です。現在では百発百中、意のままになる人など希でしょう。



END

終わり